

創立一〇〇周年を 迎えるにあたって

吉田 茂生

●西南学院理事長

西南学院は二年後の二〇一六年に創立一〇〇周年を迎える。一〇〇周年を迎えるにあたり、現在さまざまなプロジェクトが進んでいるが、今一度創立

当時を振り返り、創立者の考えていた建学の精神を、教職員・学生に徹底する必要があると考える。なぜなら、単に学生募集のため、経営のためだけに事業を展開し、その結果、建学の精神をないがしろにしては本末転倒だと思うからである。

本学院の創立者は「西南学院があなたの育成によるものでありませんならば、速やかに私たちの目を開いて、この学院を閉鎖してください」と祈られたと記されている。建学の精神にそぐわない方向に進むことがないように建

学の精神を語り、伝えていかなければならない。

ここで創立当時のことを記してみたい。西南学院は、一九一六年アメリカ南部バプテスト派の宣教師C・K・ドージャー氏により私立中学として創立された。ドージャー氏は、その一〇年前に神学校を卒業し、ただちに日本宣教のためバジニアを出航、長崎を経て、福岡に来ていた。キリスト教宣教の傍ら、福岡に私立男子中学の必要性を訴え、アメリカの宣教団に何度も要請をし、援助を求めた。やっと一九一六年認可が下り、一〇四名の生徒と九名の教職員により西南学院が開設された。

さらにドージャー氏は、宣教団に対して「福岡に第一級のカレッジを作りたいとの希望を許可してください。お金はかかりますが、それだけの価値があります。そのために大きな資金が必要です」と、具体的な計画を記した要望を出した。鋭意検討の結果、許可され、教会員の献金により資金援助がなされ、学院は土地を購入し施設を充実して大学の前身の高等学部の開設が一九二一年に認可された。

ドージャー氏は、一九一七年から一九二七年まで第二代の院長として学院の発展に心血を注いだ。当時、日曜日の対外試合を禁じたため学生のストライキが起こり辞任した。一九三三年亡

くなる前に「私は、こうして寝ている*
間も、片時も西南学院のことを忘れた
ことはない。その西南学院にくれぐれ
もキリストに忠実であるように伝えて
ほしい」と遺言した。このドージャー
氏の最後の言葉“Seian, be true to
Christ.”(西南よ、キリストに忠実な
れ)は西南学院の建学の精神として、
今も堅く、受け継がれている。

学院はその後、戦中・戦後大変厳しい状況の中、一九四七年新制中学、一九四八年新制高等学校、一九四九年新制大学を開設し、学部・研究科を充実してきた。また一九五〇年には幼稚園と保育所を併合し、二〇一〇年に小学校を開設した。その結果、現在では学生・生徒・児童・園児は約一万一〇〇〇人、専任教職員は約五八〇人にまで発展した。

理事会は二〇一六年の学院創立一〇〇周年に向けて、建学の精神を土台に、「Thanks and Next 一粒の麦から、次の一〇〇年に向かって」のキャッチフレーズのもとに、

- (1) 人や地域との絆、感謝・貢献
- (2) 時代を先取りする学術研究
- (3) 世界に貢献できる人間教育
- (4) 守り伝える建学の精神

という四つの基本コンセプトを策定した。現在、これらに沿って各種事業を展開するとともに、キリスト教を基盤とした独自の教育を各学校・園で実践しながら、キリスト教的人間観・世界観に立ち、隣人愛・奉仕の精神をもって社会に貢献する人材を世に送り出すべく努力している。

創立一〇〇周年を迎えるにあたり、創立記念式典、祝賀会などの日時も決定し、委員会をつくり具体化を進めている。また、大学のキャンパスグラウンドデザインを策定し、実行に移しているほか、募金活動を開始し、各種講演会・行事の計画も進んでいる。

さらに大切なのは、広報活動を活性化し、地域に開かれた、愛される西南学院にしなければならないということである。現在、さまざまな面で地域貢献のためのプロジェクトが進められて

いることは地域から大変喜ばれている。具体的な例としては、グラウンドデザインの中で、歩道を広げ、並木道を造り、通学路を市民に開放する予定である。

一〇〇周年後は教育の充実はもちろんのこと、次の一〇〇年に向けて、建学の精神を受け継ぎつつ、地域に開かれ、愛される学院になるよう努力を続けるつもりである。

* 『C・K・ドージャー夫妻の生涯』

